

K-337

もと まち い せき  
本町遺跡

発掘調査報告書

昭和56年3月

金山町教育委員会

# 本町遺跡

山形県最上郡金山町大字金山字本町

本町遺跡発掘調査報告書

(「山形県遺跡地図」898)

調査員：長沢正機 新国吉朗

昭和56年3月

金山町教育委員会

# 序

本報告書は、昭和55年度に実施した金山町大字金山字本町地内の「<sup>本町</sup>遺跡」の調査結果をまとめたものである。

この事業は、町立金山病院の移転改築事業により建設予定地となった地域の緊急発掘調査として県教育庁文化課の指導のもとに、金山町教育委員会が実施したものである。

本町域内には、縄文時期の遺跡所在地として確認されているものだけでも16箇所を数えるが、それらは表面採集による遺物出土を見ているのみで、組織立った発掘調査は殆どなきれておらず、今回が始めてである。その意味においても、この度の調査は、これらの遺跡群の解明にも大きく寄与することが期待されるところである。

調査に当っては、現地の指揮、出土遺物、遺跡の整理調査報告書の作製全般にわたり、発掘主任として労をとられた長沢正機先生の御努力に対し深く感謝申上げる次第である。又、長沢先生と共に協力された新国吉朗先生、顧問として指導助言された大友義助先生、金山町文化財保護審議会委員の方々、発掘作業に積極的に協力して下さった新庄北高地歴部の皆さん及び地元民作業員の方々にも併せて謝意を表する次第である。

これを機に地域の古代文化への关心と認識が更に深まることを期待して序言とします。

昭和56年3月

金山町教育委員会

教育長 大山 弘

## 例　　言

1. 本報告書は、山形県最上郡金山町大字金山字本町（もとまち）の「本町遺跡」（「山形県遺跡地図」898）の発掘調査報告書である。

2. 本調査は、金山町立病院の移転改築に伴なう緊急発掘調査である。

3. 発掘調査は、二次にわたって実施した。第1次は昭和55年4月26日から同5月5日まで（実質調査日数10日間）、第2次調査は昭和55年8月3日から同19日まで（実質調査日数12日間）で行なった。

4. 調査団組織は、次のとおりである。

　調査主体　金山町教育委員会

　調査担当者　長沢正機（主任）、新国吉朗

　調査協力　新庄北高校地歴部員、金山高校生、地元民

　事務局　齊藤 忠（教育事務補佐）、栗田弥次郎、他

5. 本報告書作成に当たって、石器実測図書きに黒坂雅人氏に一部手伝っていただいた。

6. 本報告書中、Ⅰ、Ⅱは新国吉朗が、Ⅲ以下は長沢正機が分担執筆をした。文責は長沢正機にある。また図版（地図、実測図、写真）においては、長沢に責任がある

## 目　　次

### 序 文

### 例　　言

|     |          |    |
|-----|----------|----|
| I   | 調査の経緯    | 1  |
| 1.  | 調査にいたる経過 | 1  |
| 2.  | 調査の経過    | 1  |
| II  | 調査の立地と環境 | 2  |
| 1.  | 立地と環境    | 2  |
| 2.  | 周辺の遺跡    | 2  |
| III | 遺跡の概要    | 4  |
| 1.  | 層序       | 4  |
| 2.  | 遺構       | 4  |
| (1) | 住居跡      | 4  |
| (2) | 土塙       | 11 |
| (3) | 祭壇跡      | 13 |
| 3.  | 遺物       | 16 |
| (1) | 土器       | 16 |
| (2) | 土製品      | 28 |
| (3) | 石器       | 30 |
| IV  | 総括       | 43 |

## 挿図図版目次

|      |                   |    |
|------|-------------------|----|
| 第1図  | 遺跡の位置と分布図         | 3  |
| 第2図  | 本町遺跡調査区域図         | 5  |
| 第3図  | 遺構全体図(旁:住居跡 D:土塁) | 6  |
| 第4図  | 1号住居跡             | 8  |
| 第5図  | 2号住居跡             | 8  |
| 第6図  | 10号住居跡            | 10 |
| 第7図  | 11号住居跡            | 10 |
| 第8図  | 12号住居跡            | 12 |
| 第9図  | 土塁(D18)層序         | 12 |
| 第10図 | 祭壇跡               | 15 |
| 第11図 | 土器・土製品実測図         | 17 |
| 第12図 | 第1群土器拓影図          | 19 |
| 第13図 | 第2群土器拓影図          | 21 |
| 第14図 | 第3群土器拓影図          | 23 |
| 第15図 | 第4群土器拓影図          | 25 |
| 第16図 | 第5群土器拓影図          | 27 |
| 第17図 | 第6群土器拓影図          | 29 |
| 第18図 | 円盤状土器製品拓影図        | 31 |
| 第19図 | 石器実測図(石鎌・石匙・石椎)   | 33 |
| 第20図 | 石器実測図(石斧・石槍)      | 35 |
| 第21図 | 石器実測図(石鎌・石劍・搔器)   | 37 |
| 第22図 | 石器実測図(搔器・刻線石製品)   | 38 |
| 第23図 | 石器実測図(磨製石斧)       | 39 |
| 第24図 | 石器実測図(石棒)         | 41 |

## 写真図版目次

|      |                 |    |
|------|-----------------|----|
| 第1図  | 遺跡遠景            | 46 |
| 第2図  | 粗図を始める          | 46 |
| 第3図  | 面を整理する          | 47 |
| 第4図  | 丹念に掘り進める        | 47 |
| 第5図  | 現地の説明会のようす      | 48 |
| 第6図  | 遺構の測量           | 48 |
| 第7図  | 土器片と石鎌の出土状況     | 49 |
| 第8図  | 石籠の出土状況         | 49 |
| 第9図  | 土塁(D18)の層序      | 50 |
| 第10図 | 10号住居跡と土塁(D10)  | 50 |
| 第11図 | 第12号第10号第13号住居跡 | 51 |
| 第12図 | 祭壇跡             | 51 |
| 第13図 | 祭壇跡の石棒出土状況      | 52 |
| 第14図 | 祭壇跡の層序          | 52 |
| 第15図 | 土器(小壺と小皿)       | 53 |
| 第16図 | 土偶と耳栓           | 53 |
| 第17図 | 土器口縁部           | 54 |
| 第18図 | 土器口縁部           | 54 |
| 第19図 | 土器口縁部           | 55 |
| 第20図 | 土器口縁部と底部        | 55 |
| 第21図 | 打製石斧            | 56 |
| 第22図 | 凹石              | 56 |
| 第23図 | 石皿と磨き石          | 57 |
| 第24図 | 石皿と砥石           | 57 |

## I 調査の経緯

### 1 調査にいたる経過

本町遺跡は、金山町の中心部に近いため、かなり以前から、多くの人々によって、土器や石器の出土するところであることが知られており、昭和38年、山形県教育委員会が実施した、一斉調査の際に、縄文時代中期の集落跡として確認され、正式に「山形県遺跡地名表」に登載された。

昭和54年の秋になって、金山町立病院の移転改築計画が具体化したので、金山町文化財保護審議会は、急きよ、遺跡の現況把握のための踏査や、今後の手立てを講じるための協議を重ねた。この結果、計画が予定されている地域は、遺跡の所在地であり、遺物破片の地表分布密度も濃く、緊急発掘調査を実施して、性格や規模を追求することにした。

移転計画に先だって、発掘調査をすすめるために、金山町教育委員会と、文化財保護審議会は、調査団の編成等、調査体制を確立し、昭和55年4月10日から、調査活動に着手することにした。

### 2 調査の経過

#### 調査体制

|      |                  |               |
|------|------------------|---------------|
| 遺跡名  | 本町遺跡             | 遺跡番号898       |
| 所在地  | 山形県最上郡金山町大字金山字本町 |               |
| 調査期間 | 昭和55年4月10日       | から 昭和56年3月31日 |

#### 現地調査

|     |            |    |            |    |      |
|-----|------------|----|------------|----|------|
| 第1次 | 昭和55年4月26日 | から | 昭和55年5月5日  | まで | 延10日 |
| 第2次 | 昭和55年8月3日  | から | 昭和55年8月19日 | まで | 延17日 |

|       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 調査主体  | 金山町教育委員会                       |
| 調査担当  | 本町遺跡緊急調査団 団長 早坂 宗成(町文化財保護審議会長) |
| 調査担当者 | 長沢 正機(主任調査員) 新国 吉朗(調査員)        |
| 調査協力  | 新庄北高校地歴部 金山高校生徒 地元民            |
| 事務局   | 事務局長 齋藤 忠(金山町教育次長補佐) 栗田 弥太郎    |

第1次調査は、調査地域のほぼ北半分388m<sup>2</sup>について実施し、住居跡9棟等を確認、第2次調査は、南半分374m<sup>2</sup>について実施し、住居跡4棟、祭壇跡1か所等を確認した。

## II 遺跡の立地と環境

## 1 立地と環境

新庄盆地の北縁部に位置する金山地区は、北側および東側に、独特な円錐形の山々、南に洪積層の丘陵地帯をもつ小盆地となっている。神室連峰の主峰神室山を源とする金山川が、有屋を西に下り、金山町の中心部にいたって、やや南に流路を変えると、急に視野が広がる。盆地内の平坦地は、このあたりから金山川の解折を受けており、ことに東岸は、本町疊附付近で5~7m、葛坊野の南西で上台川と合流する付近で8~10m、の段丘をかたちづくっている。

繩文時代の人々にとって、狩獵や採集が生活の手段だったので、段丘上の平坦地は、日当たりもよく、視野もひらけ、水利に恵まれて、生活を営むには絶好の場所であり、本町遺跡がこの地にあるのも、なるほどとうなづくことができる。

遺跡付近の地勢については第1図のとおりである。

## 2 関辺の遺跡

金山地区は、遺跡調査がありますんでないためか、今まで確認された遺跡は、次表に示すとおりである。(第1図「遺跡の位置と分布図」参照)

| 遺跡番号 | 遺 跡 名       | 種 別   | 時 代  |
|------|-------------|-------|------|
| 896  | 羽 場 遺 跡     | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 897  | 三 代 渕 遺 跡   | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 898  | 本 町 遺 跡     | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 906  | 安 汗 遺 跡     | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 907  | 榆 台 山 遺 跡   | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 908  | 明 安 小 前 遺 跡 | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 909  | 下 野 明 遺 跡   | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 910  | 糞 坊 山 遺 跡   | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 911  | 朴 山 遺 跡     | 集 落 跡 | 縄文時代 |
| 1001 | 平 岡 遺 跡     | 集 落 跡 | 縄文時代 |

盆地内の平坦地を金山川の他に、猪の沢川、上台川、も流れしており、いづれも金山川流域と同様な地理的条件を有しているから、丹念に踏査をすれば、多くの遺跡が点在することを明らかにできるものといえよう。

第1図 遺跡の位置と分布図



馬 滅 三 代 清 町 汐 本 安 台 9896 羽 9897 9898 9906 9907 9908 9909 9910 9911 9912  
岡 田 小 前 明 野 野 野 野 野 野 野 野 野

### III 遺跡の概要

#### 1 層序

近くを流れる金山川の影響(氾濫)か、耕作の影響か、それとも別の理由によるものか畑地でありながら層序は一定していない。掘る場所毎に異なるのである。層序をつきとめるべく、第1次調査中に北端を深掘りした。しかし結果としては土壌を掘ってしまったことになる。第2次調査においても遺物の分布範囲追求も含めて西側に1本のトレンチを設定し、その北端を深掘りしたが、これまた土壌であった。この2箇所の深掘りは、層序を明らかにするためのものであったにもかかわらず結果は予期外のものとなってしまった。しかし、人為的に掘られた部分以外をみると、次のような層序になる。

第1層は黒褐色耕土層である。地点にもよるが30~40cm続く。第2層は、黒褐色小礫層で10cm前後の層である。この第2層までは、ほぼ同じ層序となるが、以下の層は地点によって異なる。赤褐色砂礫含層があつたり、砂層があつたり、粘土含小礫層があつたりして一定ではない。ノーマルな層序図は書けないような遺跡である。なお第9図(写真図版第9図)の土壌にも層序がわかる。

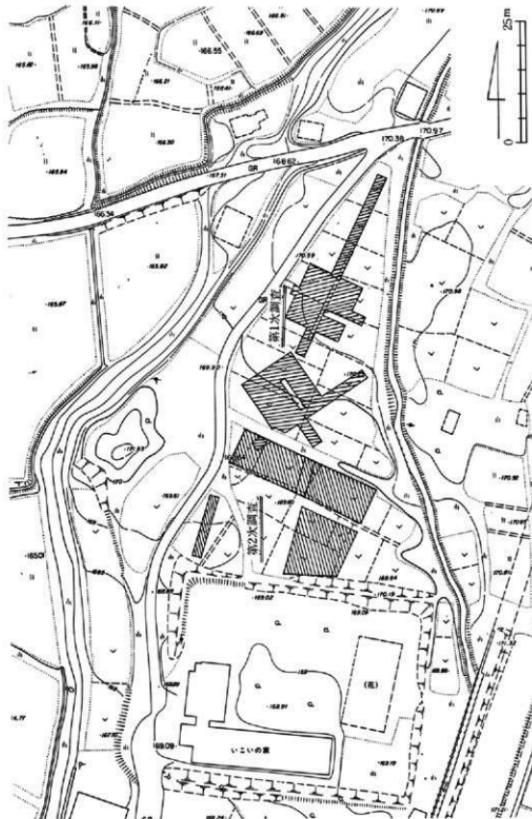
遺物包含層は、黒褐色耕土層下部からで、現地表面下約40cm前後になる。したがって小礫が多くみられる層に含み、生活面は黒褐色小礫含層であったといえる。しかしこ節でふれるように、住居跡の切り合いがとても多く、層そのものが一定でないため、断定しがたい所が多くみられる。

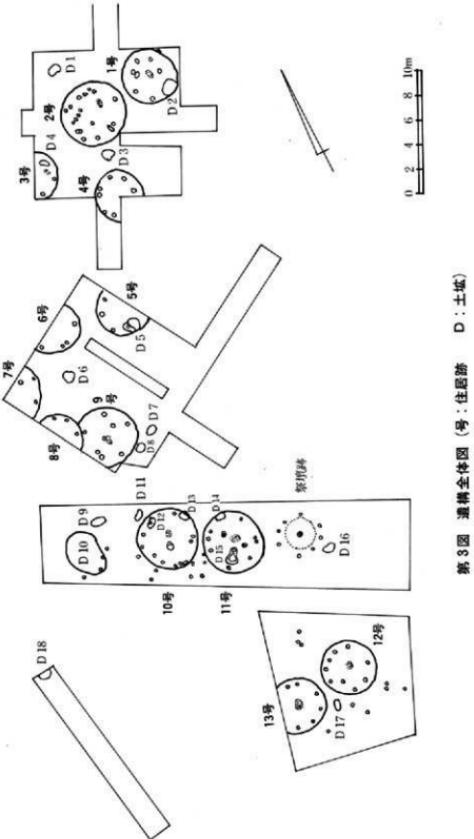
#### 2 遺構

##### (1) 住居跡

第1次調査で9棟、第2次調査で4棟の住居跡を検出している。発見順ではないが、より北方のものを1号住居とし、13号住居までを図示したのが第3図である。精査区域内でほぼ完形に近いものは、1号、2号、10号、11号、12号の各住居跡である。以下、1号住居から順次概観してみる。

1号住居跡（第4図）…………東西420cm×南北470cmのほぼ円形に近い。柱穴は7つ確認できるが、もう1つあったようである。しかしこの部分（8？）に土器片が集中して出土し、それらを追求してみたところ、土壌の1つとみなされるようになった。住居プランそのものからして、8？の所にも柱穴があったとみなされる。炉跡は、いわゆる地床炉で





第3図 遺構全体図(号:住居跡)

柱穴5と7を結ぶ線上5に近い方にある。焼土粒子がみられた。柱穴の間隔は一定でなく、いわゆる立ち上がりは10cm前後である。周溝ははっきりしなかった。なお柱穴は断面図でもわかるように一定でなく、特に8?とした部分は当然ながら深くなっていた。この部分からは縄文時代中期中葉から後半にかけての土器が多く出土している。生活面と想定される所からは中期中葉のものが見出されている。

**2号住居跡**（第5図）……第1次調査において、住居跡を追求するきっかけとなつたのが2号住居跡である。ほぼ南北に近いトレンチを設定し、遺構を追求していた時、土色の変化を検出したためである。そのため抜取して精査した結果、1号、3号も明らかになつたのである。

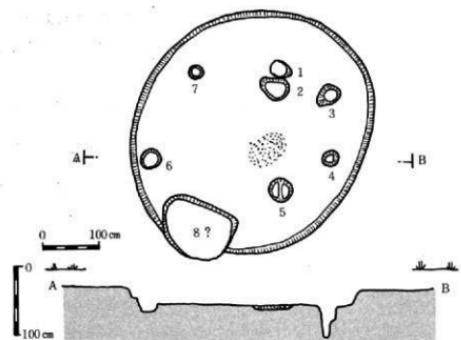
東西490cm×南北510cmを数えることができるほぼ円形の住居跡である。柱穴は16本を数えるが、主柱となったのは、第5図の1、6、7、8、9、11、と想定される。15もそれなりにがっちりした柱穴といえる。これら以外は、支柱とみるべきか、他遺構の柱穴とみるべきか、断定に苦しむ。炉跡は、柱穴7と15を結ぶ線上にあたり、この住居跡のはば中央部で、焼土粒子がみられた。周溝ははらえ難く、明らかにできなかつた。壁面は精査面より約10cmである。時期は、生活面と想定される所から出土した土器が、大木8a～8bなので、中期中葉といえよう。

**3号住居跡**……2号、4号の追求のために抜取した所、砂まじりの固い赤褐色土層の中に、黒っぽい掘りこみのある所を見出したのが3号住居跡である。焼土の確認と柱穴の確認したのが、穴住と思われていた所の1つが土跡になってしまった（土跡3）。遺物はあまり多くなく、周溝ははっきりしなかつた。

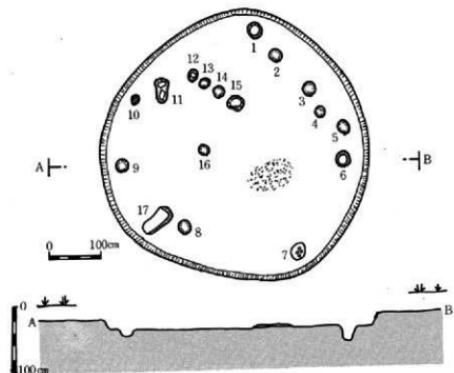
**4号住居跡**……第1次調査の細長いトレンチの中で見出したものである。土色の変化が著しく、南側は輪隔もはっきりしている。しかしごり北側ははっきりせず、炉跡も確認しないまま第1次調査を打ち切ってしまった。東西径400cmのほぼ円形になるであろうと想定される。

**5号住居跡**……小糠及び砂を含む層の中で、際だって黒ずんだ様子を呈したのがこの部分と6号、7号である。それらの層を丹念に清掃しながら追求した結果、4本の柱穴が明らかとなつた。しかし第3図のD5とある部分は大きく、結局土壇としたが、これも柱穴であったとみなされる。炉跡は確認できなかつた。

**6号住居跡**……5号と同じように、この部分だけが黒ずんだ状態のため精査した結果明らかとなつた住居跡である。柱穴は4本まで確認できたが、炉跡や周溝ははっきりしな



第4図 1号住居跡



第5図 2号住居跡

かった。

**7号住居跡**……当初土塙ではないかと想定した所である。しかし、明らかに柱穴が3本みられ、周囲の地層とは異なるし、土器片も周囲より多くみられるので、住居跡とした。調査区域の拡張が困難のため、一部分しか精査していない。このため、規模は明らかでないが、ほぼ円形を呈するプランとなるだろう。

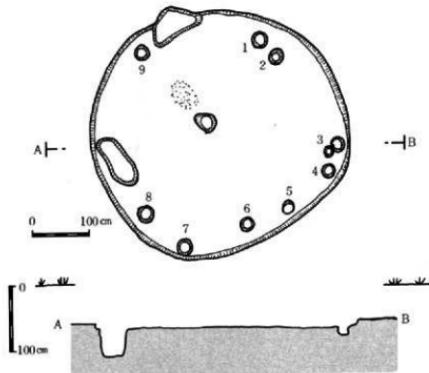
**8号住居跡**……立ち上がりは弱いが、7本の柱穴を確認することができ、地床炉も検出することができた。輪隔がはっきりせず、9号住居との切り合いがみられる。結果的にはほぼ長円形のプランとなったが、土塙が近くに2つ見つかっており、これらとの関係から長円形になったといつてもよい。

**9号住居跡**……8号住居跡と一部重複している。8号のものをぶった切るようにして造っている。住穴を3本確認したが、規模は明らかでない。

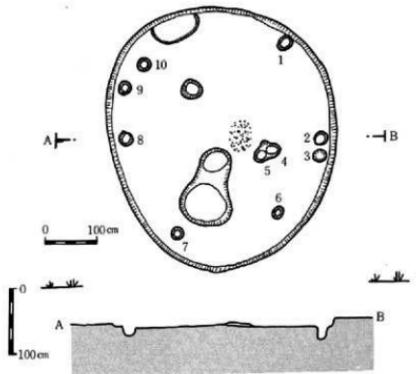
**10号住居跡**（第6図）……10号から第2次調査で明らかとなった住居跡である。10号は、6～9号までのような小砾及び砂を含む層がほとんどみられず、暗褐色土層が耕土層からずっと続いている。精査を何度か試みているうちに、地床跡が確認でき、柱穴も次々と明らかとなった。しかしプランがはっきりせず、立ち上がりの部分の追求は思うように進まず、雨上がりや早朝に、写真撮影用に組んだ椅子からとらえた結果、やっと明らかにすることができた。東西に450cm、南北に480cmのはば円形のプランとなった。柱穴はプラン内に10本を検出したが、整然としていない。また小さいけれども土塙が2つ見つかっている。第6図の断面図をみてもわかるように、土塙と柱穴が重なり合っているようである。

**11号住居跡**（第7図）……プランが明らかになるまでの経緯は、10号住居跡と同じである。ほぼ中央に地床炉がみつかった。焼成粒子がこびりつくように出土したのである。柱穴は11本を数えるが、4と5は当初大きな柱穴となっていたものが結果的に2本になってしまったものである。また7の北側にも柱穴が存在したようだが、土塙のため確認できなかった。周溝は明らかでない。精査面までの立ち上がりは、ほぼ10cm前後である。南北500cm×東西440cmの大きさである。

**12号住居跡**（第8図）……この部分は土器の出土もさることながら、川原石がびっしりあって、地層の変化がわびただしい所であった。そのため地床炉の確認は早かったけれども、プランそのものには大部手こずった。川原石を除去しては精査するという何回かの床面清掃の結果、9本の柱穴が明らかとなった。2の柱穴はちょっと内部に入りこんで



第6図 10号住居跡



第7図 11号住居跡

いるが、プランした立ち上がりにはほぼ添った形で検出されている。7~8の間隔は若干広いが、あとはほぼ100cm前後の間隔となっている。立ち上がりは約15cm。周溝は見当たらない。東西430cm×南北430cmのほぼ円形である。

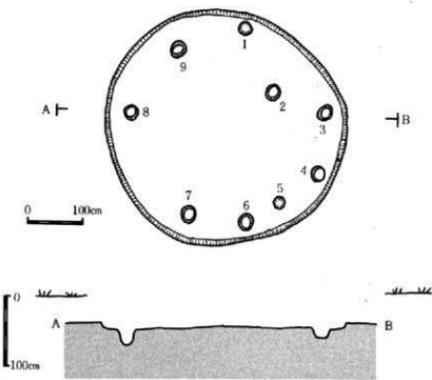
**13号住居跡**……12号同様に、川原石が多く出土したが、一段と黒ずんだ地層の中に柱穴、炉跡見つかった所である。柱穴は6本しかないが、未調査区域に2~3本あるものと想定される。炉跡は、焼成粒子がわずかながら残っていたので、これまで同様に地床跡としてとらえられる。規模は、南北の直径が420cmで、12号とほぼ同じプランといえよう。

以上1号から13号までの住居跡を概観してきたが、これ以外にも「それらしきもの」が何か所か見つかっている。10、11号には切り合ないと想定できる箇所があつたし、12号の北西側、13号の南東側にもみられた。しかしながら、これまでもふれてきたように層序が一定でなく、川原石の混入も相当あるため、またきめられた調査期間やその他の都合で、十分なる精査を実施できなかった。また出土する土器を、よく分析しないまま住居跡追求をしてしまったくらいが強く、住居跡の時期決定は判断に苦しむ。出土した土器は、縄文時代前期（大木4から）から同中期末葉（大木9まで）のものであった。もちろん前に相当する住居跡がどこにあるべきであるが、確認できなかった。1~13号までは中期に相当する土器片がほとんどであったため、縄文時代中期中葉の住居群とみなされる。大木形式でいえば7bから8aのものが中心であり、どの住居跡からも多数出土している。

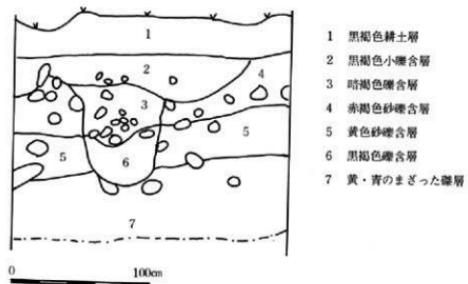
## (2) 土 塚 (第3図)

調査区域から、18箇所の土塚を検出している。第1次で8箇所、第2次で10箇所である。実際はもっと多くあったし、層序追求の深掘りの2箇所にも土塚がみられた。より北方から通し番号でD 1~D 18について、1つ1つふれなければならないが、全部の断面図や関連性等を追求することができなかつたので、主なものをとりあげると次のようになる。

まず住居跡ととらえた部分にある土塚についてははどうであろうか。これらは多分にして「柱穴」であろうと想定した部分が、伸展して土塚となった所である。例えばD 2のように、当初は柱穴間違なしと想定したにもかかわらず、地層の変化で扯張れ、中からは土器や石器が続々と出土してくる。中には復元可能なのではと思われるぐらいたつし固まって出土する。外の柱穴からは、2~3点出土するぐらいなのに、このように多量の遺物を出土するのは、機能的に十分といえないが現段階では土塚とせざるをえない。D 2、



第8図 12号住居跡



第9図 土塁(D18)層序

D 10, D 12, D 15, などがそれである。比較的少ないものとしては、D 4やD 14がある。いずれも床面（生活面）ととらえられる所から30~40cmの深さを数えることができる。

住居跡はどうであろうか。これには何といったってD 10の存在をとらえなければならない。このD 10は、当初住居跡として想定していた箇所である。周囲が小礫含砂層がびっしりとなっているのに、この部分だけが黒くなっている。しかし範囲は狭く、柱穴も思わしくないし焼けた部分もない。丹念に掘り進んでいっても柱穴らしい部分はみあたらない。縄文時代には変わらないが、土塁としての大規模のものと断定せざるを得ない。土器片が数多く出土し、それも大型破片であった。しかし復元可能までは至らなかった。

D 18(第9図)は、層序を明らかにすべく掘った結果、土塁になったものである。第2層の黒褐色小礫含層の下部にピーカー状に掘りくぼみがあり(第9図の3、6層)、これらの層に土器の混入がみられた。4、5、7層と3、6層の違いがはっきりしており、意図的に掘りくぼめたことを証明している。

住居跡内外を問わず、D 17を除けばほぼ直径50m前後の円形を呈しているのが土塁の特徴である。そして土器片や石器、石器片を多く出土している。

土塁そのものの性格がはっきりしないながらも、住居跡との関連性をみたとき、そしてここに居を構えた時期の長さをとらえた時、歴史的にはもっとあってよいのではないかと思われる。小礫含み砂層やその他の層の中にもそれらしきものがあったことは事実である。

### (3) 祭 塚 (第10図) (写真図版12、13、14)

11号住居の東方に、石棒がほぼ直立した状態で検出できた。石棒そのものは完形品とはいはず、根幹部が欠損している。しかし周囲は丹念に磨いたあとがみられ、先端部には二重円の加工が歴然としている。つまり、ほぼ平らに磨いたあとに、念入りにしかも円形になるように刻みを入れて、あたかも「太陽」を表現するが如く、二重円をつくりている。

(第24図) この石棒の周囲に粘土を張りつけていることがわかったのは、異状に黄色い土層がくっきりと現われたからである。そしてそれらが、石棒を中心点とすれば、ほぼ100cm前後になっている。

第10図にて明らかなように、石棒が立石状態に出土、それをとり囲むように粘土が敷きつめられており、この粘土部分がなくなると柱穴が8本とらえられる。石棒の中心から柱穴の中心までの距離は、柱穴1から順に、70、80、80、75、70、70、65、68cmを数える。すなわち、70~80cmの半径上に柱を建てていたことになる。

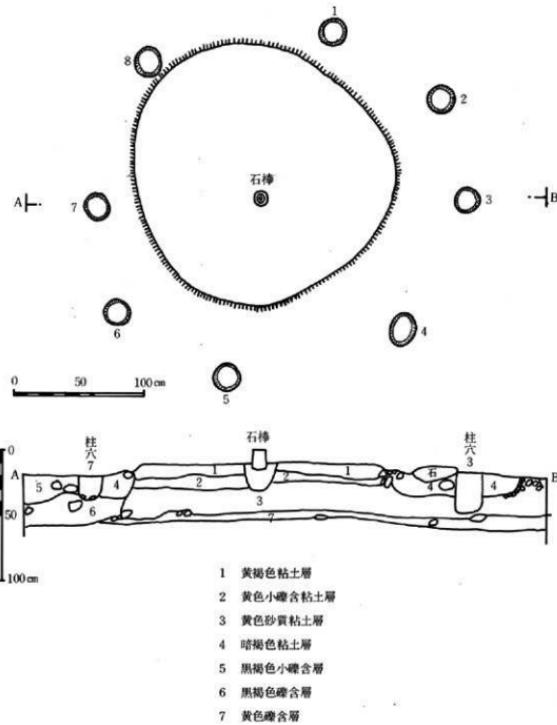
断面図からみてみると、石棒を据えるために、人為的に掘りくぼめていることがわかる。この掘り方部分からすれば、石棒そのものは30cm前後のものであったといえる。掘り方部分の両側に黄褐色の粘土層を約10cm敷きつめている。その下部に、黄色小礫含粘土層が薄く敷き、黄色砂質土層へと続く。一方黄褐色粘土層が切れる両端には、暗褐色粘土層がみられる。そして柱穴の3と7がはっきりと区別される。これらの柱穴の周囲に小礫があることも特徴といえよう。根固め石などのかどうかははっきりしないが、マウンドとした黄褐色粘土層の部分にほとんど礫がみあたらないのに対し、マウンド外にはそれなりの小礫や大きいものが混入しているのである。

また、柱穴まではほぼ同じような地層になっているが、それより離れていくと異なる。南東側は、暗褐色粘土層をぶった切るようにして、土壘（？）を形成している。あまりはつきりしなかったが、小礫を混入させている。北西側は、柱穴より黒褐色小礫含層が続き黒褐色耕土層（土塙？）が深くもぐりこんでいる。

この遺構周囲からの遺物は、あまり多くない。わずかの土器片の出土をみたが、小片片のみである。時期は繩文中期中葉ととらえられる石棒のすぐ南東側に凹石が1点出土した。また、柱穴5の北西側に小皿（第11図の7）が出土している。

さて、以上みてきた「特殊遺構」は、どのようにとらえればいいのだろうか。まず石棒そのものの性格を明らかにしなければならない。ここから出土した石棒には、他地点から出土したそれらと明らかに異なっている。大きさからみればやや小形であるし、加工のしかたからみれば、先端を平らにして二重円を施しているのはこの1点だけである。茶筒のように継断面が長方形に近くなるのも特色のひとつである（外の石棒は胴ふくらみが多い）。さらに明らかに直立できるように部分的に掘りくぼめていることである。外の石棒は倒れた状態で出土している。また、粘土を敷きつめていること、それもほぼ円形にきちんと施しているという状況、柱穴が8本も周囲にみられることなど、それなりの目的があったものといえよう。それは何だったのだろうか…………。

調査においても、いろいろの憶測をめぐらし、類例出土の有無を探索してきたが、これぞという見解には至っていない。しかし、少くとも「特殊遺構」であることは歴然としているし、石棒そのものを呪術的なもの、祭祀的なもの、あるいは權威的なものなどいろいろとらえていくと、さらに壇そのものを意図的に形成したことをふまえれば、石棒そのものを崇拝する信仰的性格のものであったといえそうである。このようなとらえ方から、現時点では「祭壇跡」と呼称し、他遺跡の類例を待つことにとどめておきたい。



第10図 祭壇跡

### 3 遺物

#### (1) 土器

発掘調査によって出土した土器は、整理箱20を超える数量となった。しかしながら、現地表面下40cm前後に埋蔵されていたためか、破片としての出土がほとんどで、一括出土も多くはなかった。したがって復元可能の土器は少く、4点を数えるにすぎない。第11図の5~8の土器である。

5の小壺は、粗雑なつくりで、文様もほとんどない。一部刷毛目状のものを認められるけれども、これは土器製作の時に出来たものといえ、意図的に施したものとはいえない。つまみが1ついているが、欠損している部分にもあったのかどうかは断定しがたい。多分にしてなかつたものといえよう。このつまみまでの器高は7.8cmである。口径ははっきりしないが、底径は3.8cmである。

6の小壺も粗雑なつくりで、特別な文様は見当たらない。口縁部がわずか残っており、器高3.7cm、底径3.4cmを数える。

7の小皿は、祭壇跡付近から出土したものである。底部は平らでなく、平面上に置くと落ち着きがない。口縁部は欠損している方が多いけれども、一部に原形をとどめている。器高1.3cm、口径2.6cm、底径1.4cm。

8の皿は、これまでのものと比べると、若干精製であり、特に内側は丹念になぞった跡がみられる。しかし文様はみられない。器高2.8cm、口径6.2cm、底径2.5cm。

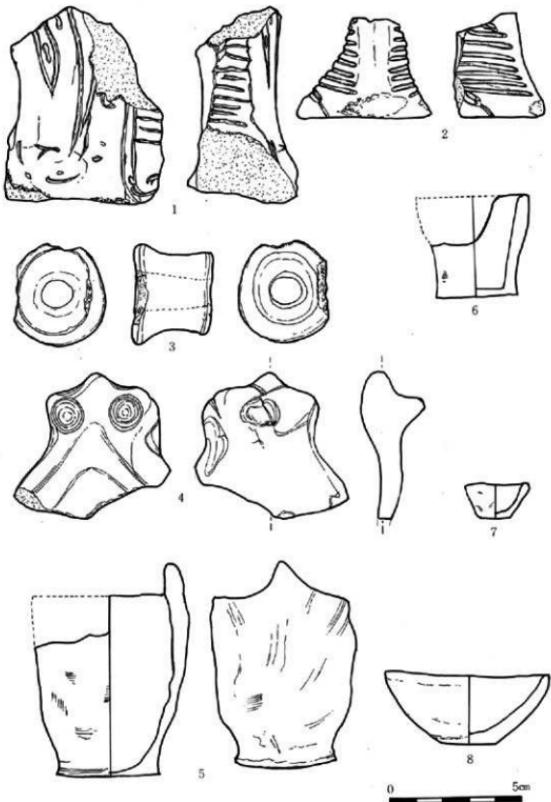
以上4点の外は、集中して出土した土器片等の復元作業をいくつか試みたけれど、口縁部が欠損していたり、底部がなかつたりして復元は出来なかった。

出土した土器片を群としてとらえてみると6つに大別できる。以下それについて記述すると次のようになる。

##### ① 第1群土器（第12図）

绳文時代前期に位置する群である。細い粘土紐を貼付しているのが特徴。

拓影図1は粗い斜縄文の上に梯子状文を施しており、口唇部は欠損しているが、波状を呈していたとみられる。2、3は梯子状文はみられないが、粗い斜縄文を地文として、粘土紐による2~3本1組の連續山形文を縦位に貼付している。これらの粘土紐は、長い1本を利用して山形文を形成しているのではなく、小さく切りながら、器体のより下部の方から1つ1つ貼りついでいる。4は口縁部であるが、粘土紐を口唇に平行するように



第11図 土器・土製品実測図

2本貼付し、下の1本につなぐように縦位に山形文を貼付している。以上の4点に対して5~10は横位に粘土紐を貼付している。

5は山形文に貼付する同時に、これらを囲むように下部に1条の細長い粘土紐を貼付している。地文は無文である。貼り合わせの部分が鋭角な5に対して6、7、8はやや丸味をおびている。いわば小波状文ともいえるものである。5はほぼ幾何学的に統制されているのに対し、6~8は整然としていない。いずれも斜縞文を地文としている。なお、6、7は粘土紐を貼付する時に押しつけたためかやつぶれたものとなっているが、8はそれらがあまりみられない。

9~11の土器片には、小波状の山形文を貼付しながら、1~2条の粘土紐で区画をしている。9は、粘土紐を貼付した後、それを追うようにして沈線の小波状山形文がついている。横に貼付した紐にも同様にしており、不規則ながらその下部にも小波状文を沈線で施している。10の小波状山形文は、1本の粘土紐をちぎらないで貼付している。横の粘土紐には、9同様沈線がみられる。11は、横粘土紐を貼付した後、より下部に3条の平行沈線を施している。いずれも斜縞文を地文としている。

12、13は、不整形であるが、やや太めの粘土紐を貼付している。12には、円形のボタン状貼付に小波状山形文を結合させている。13は複雑な文様で、粘土紐貼付もあれば、平行沈線、刻目、竹管文もみられる。

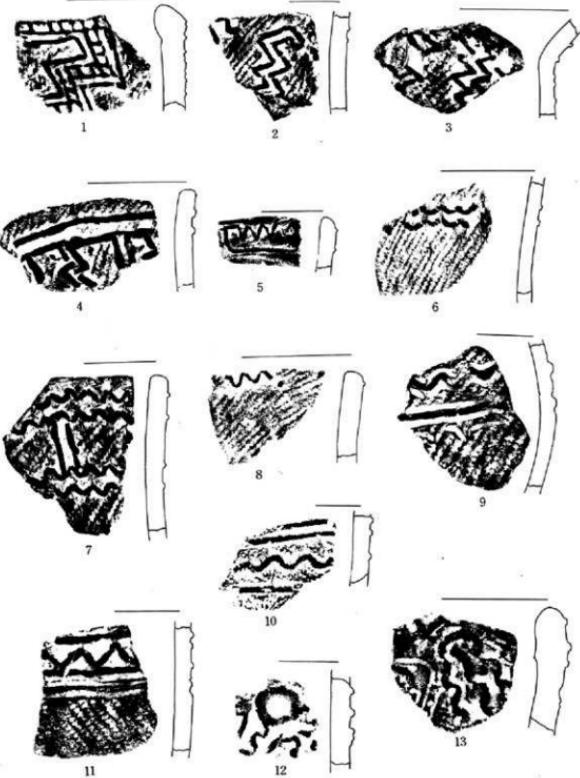
以上の第1群土器は、胎土に繊維を含むものがほとんどである。

## ② 第2群土器（第13図）

半截竹管及び竹管によって施された文様を持つグループの土器群である。前期末から中期初頭に位置づけられよう。

14は口唇部である。口唇部に磨いたあとがみられ、平行沈線によって盛り上げた部分（粘土紐ではない）に、半截竹管又はヘラ状のもので、刻目をいれている。それより下部に撲糸压痕がみられ、平行沈線が左横右傾している。15は波状突起の部分で、一部欠損しているが、器内に向けて5条の沈線がみられる。山形の左側はヘラ状のもので削りとったことがあるが、右側には、小さな刻目がみられる。これらの口唇部に平行するかのよう平行沈線がつくられ、左側には未整然としているが半截竹管文が認められる。縞文はみあたらぬ。

16は波状口縁部である。半截竹管による平行沈線をつくり、その下に歯齒状の平行沈線



第12図 第1群土器拓影図

0 5 10cm

文を施している。地文はない。

17は半截竹管又はヘラ状のもので、突き出した文様と、沈線がみられる。地文に撚糸を圧痕している。18は、平行沈線の中に、典型的な半截竹管文を施している。拓影図にはあまり明らかにされていないが、2条の平行沈線の下部に再び半截竹管文の一部が認められる。

19は平行沈線によって一区画をつくり、その部分にやや右傾斜するように刻目を施している。20は2条の平行沈線とやや盛りあがった帯状部に、右傾斜しながら刻線を施している。これは、棒状のものでかきなでたというよりも、板状のものを押しあてたといった方がよい。

21は口唇部の帯状隆起部にくつけるようにして2条の粘土紐を貼付している。これに半截竹管文（不規則である）を与えている。

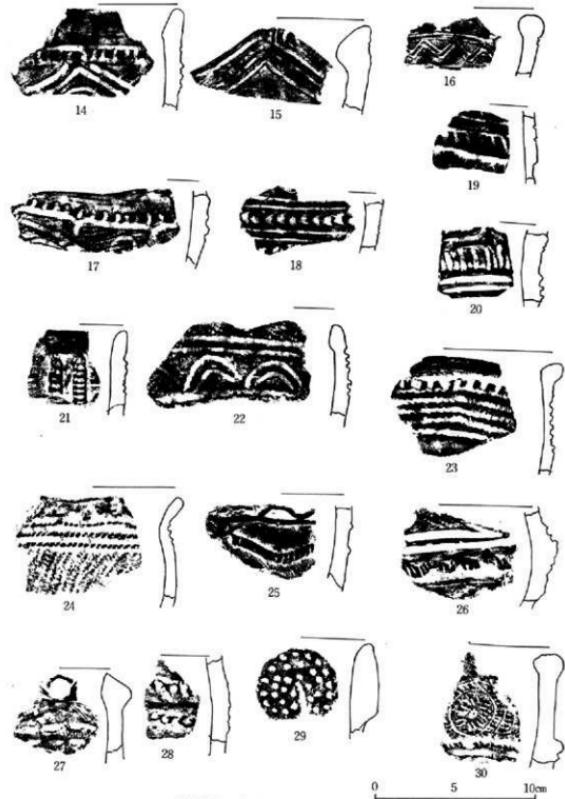
22は、地文に斜線文を施しているが、鮮明ではない。波状口唇に2条の平行沈線そして、やや大きな波の平行沈線を有して、さらに沈線を横に大きめに与えて区画している。

23は6本の撚糸压痕文を地文とし、口唇部から1～2本めの中に半截竹管文を与えている。

24は、3本の紹状隆起部に、小さざみに半截竹管またはヘラ状のもので刻目を与えている。一見模文に見間違うぐらいである。25は、第1群にみられた波状山形文の粘土紐貼付がみられる。そしてより太めの粘土紐を大きく波うたせながら貼り付け、その部分に爪形文を施している。26も平行沈線を2本つくり、粘土紐を貼付し、それに爪形文を施している。

27は、突起部に円形の穴をつくり、両側に深い刻線を与えている。そして、棒状で斜め横から刺突文を平行して施している。28はあまり鮮明でないが刺突文を平行して施している。いずれも地文はみられない。

29、30は特異なもので、これまでみてきた第2群の範囲に所属するのかどうか疑わしい。かといって、この2つに接続する土器片も見当たらないし、類例もないので、一応「刺突文」「平行沈線文」を有する中間として位置づけておく。29は、口唇部である。ほぼ円形の突起部で、31個の刺突文が數えられ、中央下部に深い刻線がみられる。30は口縁部である。突起の部分に平行沈線がみられる。円形の刻線が3本あって、中心の凹部にむけて、小さな沈線が放射状にみられる。2重3重の円形刻線にも同じような文様がみられる。それらの下部に段をつくるが如く隆起部があるが、ここにも平行沈線が小さざみに



第13図 第2群土器拓影図

施されている。いずれも胴部や底部がわからぬため、どのような器形のもとに施された文様なのは明らかでない。

### ③ 第3群土器（第14図）

撚糸の圧痕を横方向に、直線または曲線的に施す群。31は地文に撚糸圧痕文を持ちこれに深く強く撚糸を圧痕している。横方向に圧痕するものと、曲線的に入っているものとがセットとしてとらえることができる。また2条の隆帯部内に紐を貼付し、それにも撚糸文を圧痕している。32は地文ははつきりしないが、突起部に向けて3条の撚糸圧痕文がみられる。さらに平行沈線文が「く」の字形に施されている。

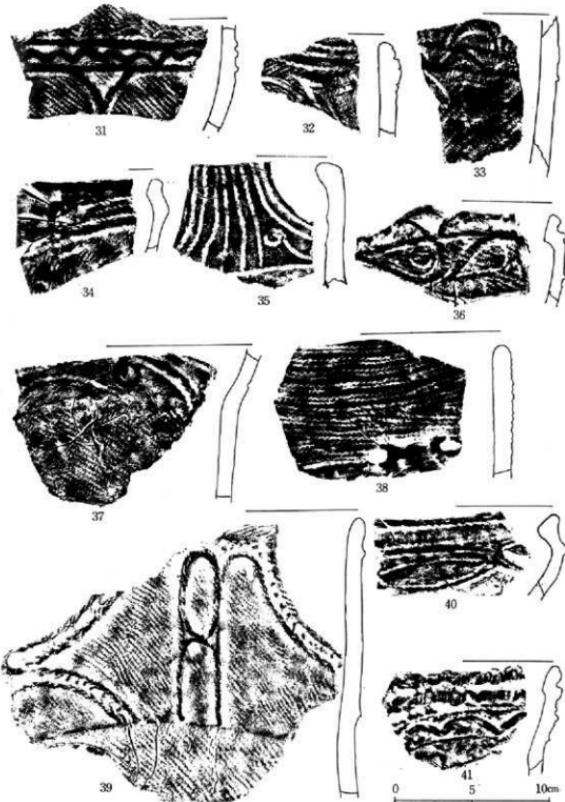
33にも撚糸圧痕文を地文の上に重ねるように押圧している。頸部と胴部との境をつけており、胴部には縦に圧痕を、頸部には波状に圧痕している。34は隆帶にそっての撚糸圧痕文を、35は縦に施している。この35は、口唇部で波状突起を呈している。8条の撚糸圧痕文があるが、右側から2番目までは右斜下に、3番目からは左斜下に向けて押圧されている。そのため2番3番目の中间に空間ができるのだが、ここに下方からのびてきたように渦巻状の圧痕文がみられる。頸部にも横方向に撚糸圧痕文が1条施されている。

36、37は、撚糸圧痕文を渦巻状に施している土器である。口縁部は指で磨いたのかすべすべしているが、36のように撚糸圧痕文でもって隆帯をつくったり、頸部と胴部との境をつけたりしている。37は、縦にも撚糸圧痕文を施している。

口縁部を丹念に指で仕上げ、その上に撚糸を圧痕しているのが38の土器である。「ハ」の字形になるようしているが、途中で逆になっている所もみられる。頸部には突起部を設け、胴部と区画している。

39は大型破片で、出土した時は4つになっていたのが接合したものである。波状口唇部を形成し、突端部には撚糸圧痕文を軽く与えて地文としている。両側には半截竹管（縄文？）連続させている。さらに粘土紐を貼付し、これにも縄文を圧痕している。口唇より頸部にかけて粘土紐で長円形及び半長円形をつくり、この紐にも縄文を圧痕している。また、これらの長円形をかたどるように撚糸を強く圧痕するという念の入った文様施行である。地文は器体全面にわたってあるものと推定されるが、胴部には地文のみであって、頸部から上の部分にだけ念入りな文様を施しているといえよう。

40は、隆帯を区分けするように撚糸を圧痕している。したがって口唇には1条だが、下方の隆帯には2条の圧痕文が施されている。これとは別に、やや曲線状に圧痕し、結果的



第14図 第3群土器拓影図

にレンズ状になっていることも特徴的である。

41は、第3群の特徴を全部そろえているといえよう。隆帯に撫糸圧痕、粘土紐貼付の周囲に撫糸圧痕、さらに口唇部と頸部とを区画するかのように1条の撫糸圧痕と、多彩にわたっている。

#### ④ 第4群土器（第15図）

渦巻文と縦に圧痕した撫糸文の仲間と一緒にした群である。

渦巻文は第3群において部分的にみられるようになる。撫糸圧痕文においてであるが、第4群においては、粘土紐そのもので形づくるようになる。42~48までのものがそうである。

42は、いわゆるキャリバー型の口縁部で土器そのものがとても精緻されている。口唇部に3条の隆帯をきちんと設け、斜横文を圧痕した後、渦巻文を施している。それ以前に細紐を意図的に（渦巻状に）貼付したとみるべきである。つまり、3条の隆帯、そして撫糸圧痕文も施し、その後に細い粘土紐を貼付し、その周りを棒状又はそれに類似するものでなぞり仕上げている。しかし渦巻状に貼り付けた紐に必ずしも添ってはいない。42もほぼ同じような施文を与えていている。

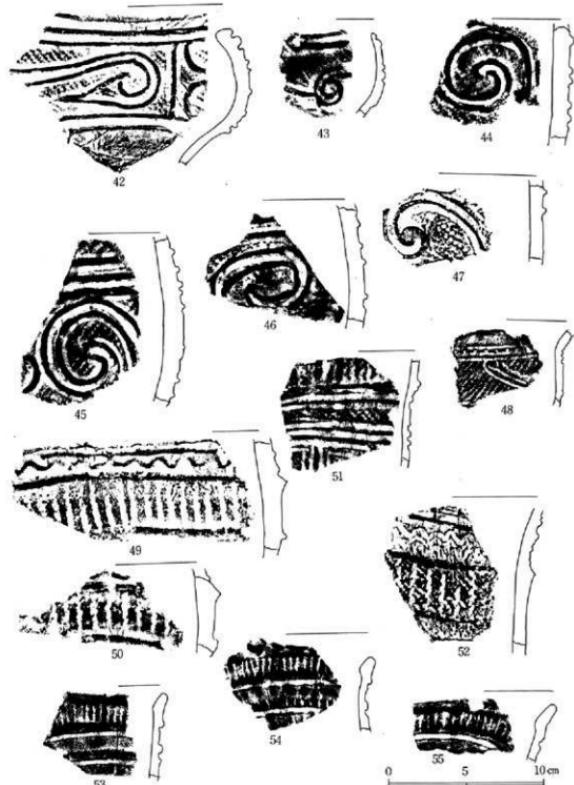
44~47は、渦巻の方向に違いがみられるが、ほぼ同一の手法を用いている。2条の粘土紐を貼付し、周りを棒状のものでなぞり渦巻を形づくっている。

48は頸部である。3条の平行沈線文を施し、盛り上がった部分に刺突文を与えている。平行沈線文から下部には撫糸圧痕文を施し、沈線で渦巻文を形づくっている。

49~55は頸部がかけて、縦に平行するように撫糸を強く圧痕した仲間である。49の口唇部は欠損しているが、横一直線になるように粘土紐を貼付し、さらに小波状山形文の粘土紐を貼付している。そして再び横に粘土紐を貼付しているのだが、拓影図左側にそれはあっても右側にはみられない。右側は盛り上げているにすぎない。この部分から約3cmにわたって、ほぼ同間隔（8mm前後）で縦に撫糸を強く圧痕している。この撫糸圧痕文をおさえるかのように、粘土紐を横に貼付している。50もほぼ同じである。

51は頸部から胸部への土器片である縦に撫糸圧痕文を施し、粘土紐を貼付したところより下部に平行沈線文を与えてている。その下部には長方形を形づくるが如く沈線を与えている。

52は沈線による鋸歯状文を2条施し、粘土紐を貼付した下部に、撫糸圧痕文を与えてい



第15図 第4群土器拓影図

る。

53、54は口唇部に粘土紐を貼付せず、隆起部を利用してすぐに撫糸文を圧痕している。そして指又はヘラ状のもので平らになぞった下部に粘土紐を貼付し、そこにも撫糸圧痕文を小さく施している。なお54の口唇部に満巻状の小突起をつくっている。

55は、54のように口唇部に小突起をつくり、隆起を利用して下部の沈線文までの部分に撫糸圧痕文を施している。

以上の撫糸圧痕文を検討すると、口唇部から口縁部にかけて文様帶をもつものと、そうでないものとに分かれる。しかし頬部にかけて圧痕文を施すのは共通している。

#### ⑤ 第5群土器（第16図）

粘土紐を満巻状に貼付した一群である。

56は深鉢の口縁部であるが、とても太い粘土紐を用いて満巻文を形づくっている。第4群は2本の粘土紐と沈線によって満巻文を形成していたのに対し、1本の粘土紐を用いているのが特徴といえる。しかし、両者とも粘土紐の周りを沈線で囲んでいるのは共通点である。

57は複合口縁で、突起部を有している。地文に撫糸を圧痕し、その上に粘土紐を貼付して満巻文を形成している。

58、59は地文を残しながら満巻文を施している。58は口縁部に内済するが、59は平らである。59の満巻文には、地文の撫糸圧痕文が一部残在している。

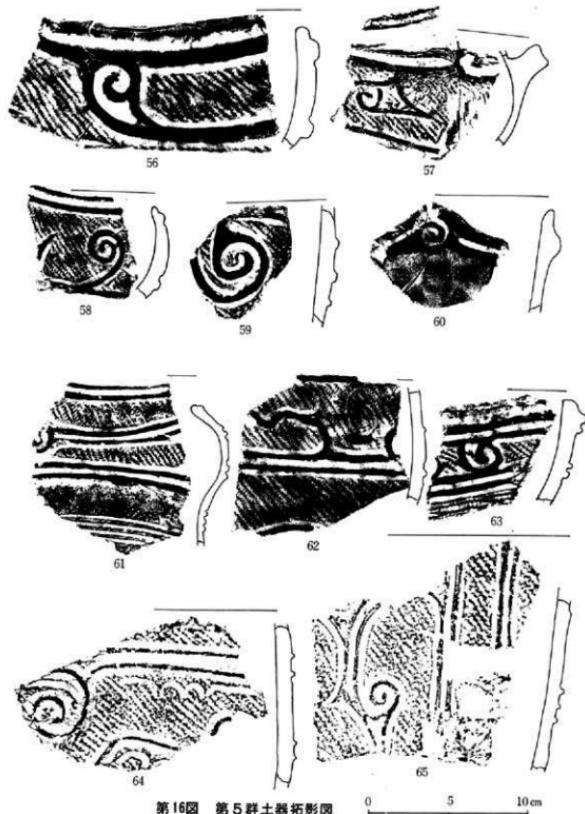
60は地文がみられない。すべすべしており磨きあげたようである。波状突起の部分に満巻文を施しているが、粘土紐を利用していない。やや部厚くした突起部に沈線で満巻文を形づくっている。

61～65は、いずれも粘土紐を貼付して満巻文を施している。地文を繩文にし、沈線文を巧みに活用しながら、満巻をひきたてている。なお64、65は深鉢の胴部である。

#### ⑥ 第6群土器（第17図）

磨り消し状がみられるようになる一群である。66は口縁部であるが、満巻文の周りを意図的に磨り消しているといえよう。拓影図の裏側（器内）にも満巻文を形づくっている。

65、66ともに、満巻文を丹念にヘラ状のもので削りとっている。磨り消し繩文とまではいえないが、初期の手法ととらえられる。



第16図 第5群土器拓影図

69、70には直接渦巻文は見られない。69の地文の繩文は不整然としているが、粘土紐を貼付した後に、ヘラ状（又は棒状）のものでなでてている。70、71は、第5群の土器に位置づけることができるが、地文を削りとるようになでてしているので、第6群の仲間にしておく。

72、73は、これまでとは若干趣を異にしている。72は、第4群にみられた縦に撚糸圧痕をなし、粘土紐で朝顔の花びらのような文様をつくっている。地文に繩文を施した部分と無文の部分がある。72は口唇部は無文であるが、他は72のように長円を縦に粘土紐でつくっている。72の拓影図右側には波状山形文を貼付しているのに対し、73は刺突文を施している。

74は、円形のくぼみをつくり、粘土紐で曲線を形づくっている。一部に繩文を認めることができるのだが、大部分はヘラ状あるいは指で磨きあげている。

75は深鉢の脇部である。第6群よりはむしろ第4、第5群の脇部に相当しよう。ただ渦巻文を主体としていた第5群からみると、いろいろな文様がみられ、複雑化している。比較的のちろく、胎土にもいろいろの物がみられる。

## (2) 土 製 品

### ① 土偶（第11図1、2）

出土した土偶は2点である。いずれも完形品ではなく、第11図の1は脇部、2は脚部である。

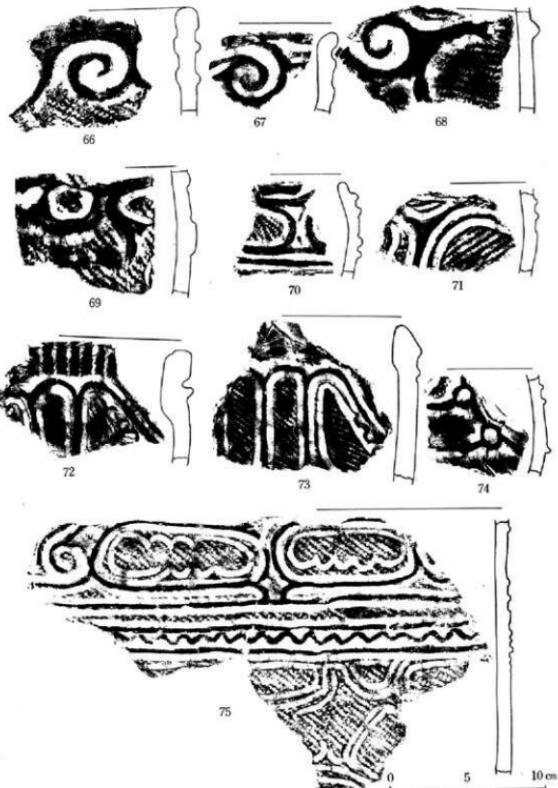
1は胸から腹にわたっている。沈線文を縦長に与え、いわゆる脇の部分には平行沈線文を幾条にも施している。背部には何も施していない。

2には平行沈線文を両側に幾条にも施している。足裏には文様がなく、踵の部分が欠損している。

これらの土偶は、繩文時代中期中葉に位置づけられるものと考えられる。

### ② 耳栓（第11図3）

臼形を呈しており、穴が貫通している。一部破損しているが、ほぼ完形品といってよい。実測図の左側には、「ソリ」がみられるが、右側にはほとんどない。また穴も左側の方が大きく右側に行にしたがって小さくなっている。



第17図 第6群土器拓影図

### ③ 円盤状土製品（第18図）

11点の出土をみている。不整円形で、4～5cmの直径を計ることができる。第18図の7から10までは撚糸圧痕のみのもの、1から6までは一部に撚糸圧痕を有するもの、11は無文である。なおこの11は磨滅がみられほぼ平らなので、土器の底部を利用したものとみられる。これ以外は、胴部の利用といえよう。

### ④ 獣面状把手？（第11図4）

獣面把手と断言できないが、数多く出土した把手の部分がある中で（写真図版第17、18、19図）、この1点だけ異形を呈している。外側は両腕を交差するような形状を、内側にはさも両眼を呈するような円形のえぐりを入れている。一応獣面状把手として、類例を待つこととする。

### ⑤ その他

たった1点だが、朱塗りの土器片が出土した。3cm×2cmのほぼ三角形になる小さな土器片であるが、表裏ともに朱が明らかに認められる。外側にある部分には、一条の沈線文があるが、内側は整形されていない。また外側は朱を塗ったといえるが、内側のものは付着したといえよう。いずれにしても、縄文時代中期のものとしては特筆されよう。

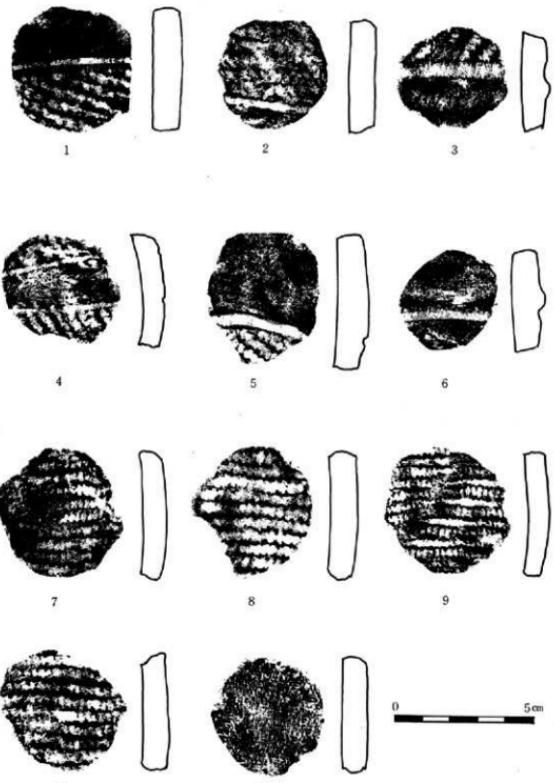
以上の外に、土器の底部に木の葉文を有するものが数点出土している。いずれも広葉樹のものである。また、網代状の文様を有するものも數点みられる。無文のものが多いのは当然であるが、器形によるものなのか、製作時期によるものなのか、それとも偶然なのか明らかではない。

### ③ 石 器

#### ① 石 鏋（第19図1～6）

石鏃は全部で6点出土した。外の石器数からみると少ないと見える。1～5は、抉りがはっきりしており、6も片方が欠損しているが完形品であったなら同じような形状であったといえる。

石材は、3のものが黒耀石を用いている外は頁岩である。5は長さ5cmもあり、石鏃の仲間としては大きい方である。



第18図 円盤状土製品拓影図

#### ② 石 鏃 (第19図7~10)

全部で4点出土。いずれも縦長形石駄であるが、つまみの部分は一様でない。7は細身ですらりとしているが外は幅広い。また7はつまみの部分及びその周辺にしか加工はないが、外のものは、縁辺部に加工のあとがみられる。8は打面を除いて全縁辺部にしかも表裏にわたって加工を施している。9は短角形を呈しているが、加工そのものは8よりはやや少ない。10は形態的には8と同じといえるが、主剥離面（裏面）にはあまり加工がみられない。

いずれも頁岩を用いているが、縦長形ばかりという点では、本町遺跡の時期決定に大きなポイントになるといえよう。

#### ③ 石 錐 (第19図11~13)

基部を欠損しているが、3点出土している。3点とも奇しくも5.3cmの長さを測ることができる。石材は頁岩であるが12はやや砂まじりの頁岩である。

11、12は断面がほぼひし形に近く、錐としての機能を十分に発揮したといえよう。一方13は、やや凸レンズ状になっており、加工のしかたも押圧剝離を丹念に行っている。石槍の一部とみる向きもあるが類例が出土していないので、石錐の仲間にしておく。

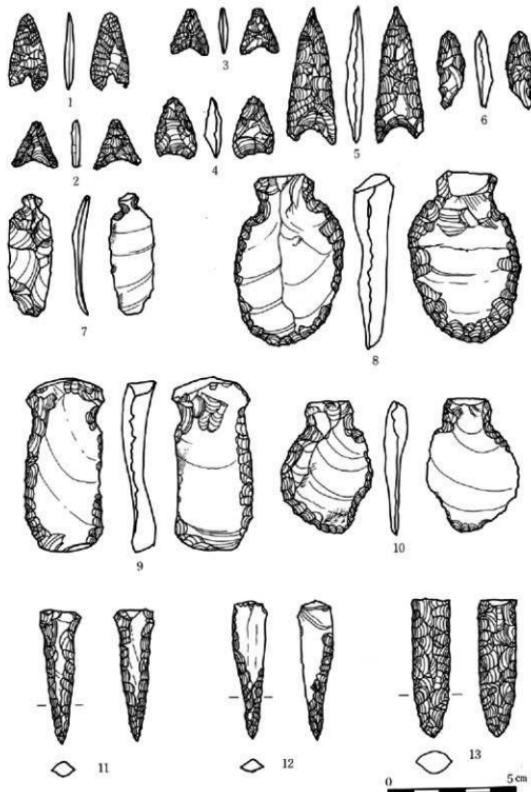
#### ④ 石 箕 (第20図14~20)

全部で7点出土しており、いずれも頁岩製である。最大幅値が先端部にある台形状になっているのが14~17のものである。

14は最大長（以下、長と記す）6.1cm、最大幅（以下、幅）3.4cmで、裏面に原石面を一部残している。また裏面先端部には加工痕がみられない。15は長4.6cm、幅2.8cmで、表裏面とも加工を施している。16は長6.5cm、幅3.8cmで裏面先端部には加工痕がみられない。17は先端部が欠損している。現有数は長6.8cm、幅4cmで階段状の剥離が荒々しく施されている。

18は、最大幅値を中央部（胴部）にもつもので、長7.4cm、幅3cmとなる。両先端とも欠損がなく、やや光っているため、槍形石器の範ちゅうに入る可能性もある。

19、20は両側縁がほぼ平行しており、先端の刃部が丸味を帯びている石箒である。19は長6.4cm、幅2.4cmで、これまでみてきた石箒と異なり、断面が凸レンズ状となっている。それだけに押圧剝離がきちんと施されている。20は長5.2cm、幅2cmでこれも凸レンズ状の



第19図 石器実測図(石鏃・石匙・石錐)

断面となる。

#### ⑤ 石 槍 (第20図21)

たった1点だけであるが、先端部を鋭く光らせている。中央部の断面は三角形になるが先端部はひし形に近くなっている。長6.4cm、幅2.6cmで石材は頁岩。

#### ⑥ 石 錘 (第21図22～25)

4点の出土例をみている。4点とも石材が異なり形状も異なる。

22が最も大きいものである。長6.4cm、幅5cmのほぼ長円形を呈す。石材が粗い砂岩のためか、抉りがいれやすかったらしく、外の石錘よりもより深く刻みが入っている。

23は長4.4cm、幅3.5cmの円形に近い形を呈す。刻線が長く両面はほぼ同じ長さになっている。裏面を磨いたらしく、側面図をみてもわかるように図の右側は平らになっている。

24、25は細長で小形である。24の長は4.6cm、幅1.9cm、25の長は4.4cm、幅2.5cmとなっている。24は左側に、25は裏面にわずかながら磨いたあとがみられる。

以上4点の石錘をみると、川原石そのものの用いているわけだが、形状を整えるためか磨いている部分（22は表裏にわたっている）があること、刻み目をはっきり深くしていること、大きさが異なることなど、数量そのものは少ないが本町道路の時期及び性格をひととくには貴重な資料といえる。つまり金山川→鮭川→最上川の流れ、魚類（特に鮭や鱒類等）を食料としたこと、漁具の一部とみなされる石錘、などと興味ある遺物といえる。

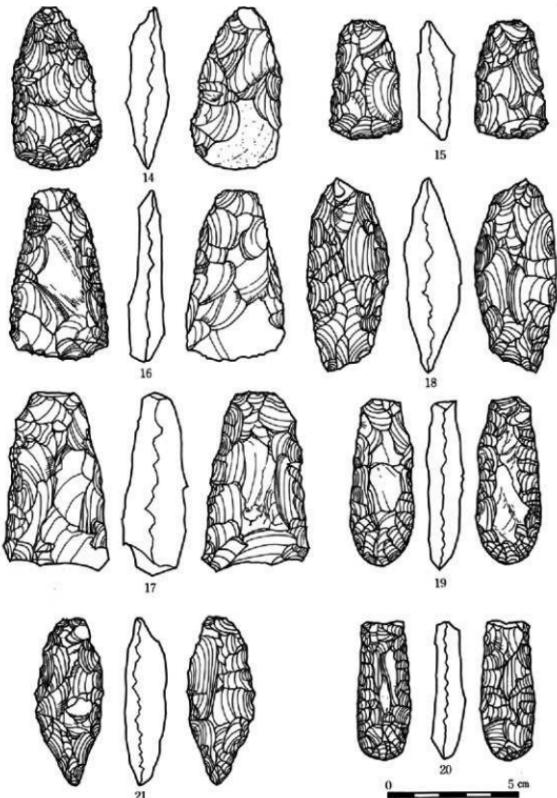
#### ⑦ 石 剣 (第21図26)

折れた状態で出土したが接合した。先端部と基部が欠損しているため、大きさははっきりしない。すったあとがはっきりしているけれども、形状は定かでない。現有数値は長が9.6cm（図の左側）、幅2.8cmとなる。

#### ⑨ 搗 器 (第21、22図27～35)

ごく一部の使用痕や加工痕のものを除いて、摺器とみなされるものを9点とりあげてみた。

27～29は、石匙に近い摺器である。いざれも加工痕がはっきりしており、28、29はほぼ



第20図 石器実測図 (石鎧・石槍)

全周囲にわたって施されている。27は、左側縁の一部が無加工であるが、先端部や右側縁には丹念な加工が行われている。いずれも意図的に製作したものといえよう。

30~35は、剣片を利用した搔器である。30は右側縁に加工しているが、基部がしっかりしている。31~34は、形が不一致ながら、搔ぐための機能を十分に果たすよう加工している。

35はこれまでみてきたものとは若干異なる。形そのものが菱形に近いこと、表裏ともに加工していること、「横割ぎ手法」に近いような剣片になっていることなどである。「不定形石器」ともいえるが、搔くことが主目的とみなされるため、搔器に位置づけておく。現有数値を順に追うと、27は長6cm幅2.2cm、28は長5.7cm幅2.5cm、29は長2.9cm幅2.2cm、30は7.6cm幅4cm、31は6.2cm幅4.4cm、32は長4.5cm幅3.6cm、33は長6.6cm幅6.1cm、34は長5.6cm幅5.2cm、35は長4.2cm幅5.7cmとなる。

#### ⑩ 磨製石斧（第23図37~42）

全部で6点出土したが、完形品は1点のみである。37がそれである。長が8.5cmで上端部の幅1cm下端部の幅4.2cmの大きさである。石材は石英質のもので、とてもつやがある。それだけにみがきが丹念に行われたといえる。なお先端に使用痕の跡とみられ擦痕が認められる。

38は頭部のみで、現有数値は長6.1cm幅4cmを数える。石材は砂岩質のものであり堅固ではない。39も砂岩質のもので長6.5cm幅5cmである。側縁部が平行になっているため、37や38のような頭部（台形に近い形）にはならなかつたといえよう。

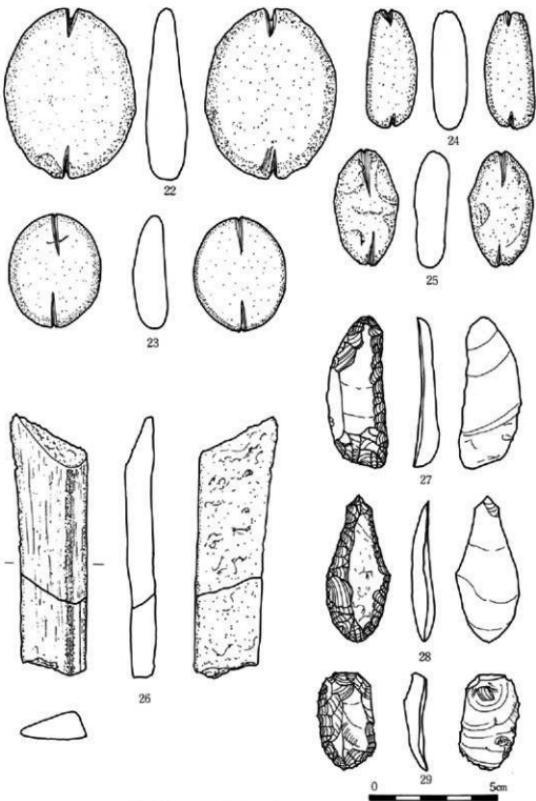
40は先端部の一部分だけである。しま模様のつく緑泥岩質のものを石材としている。つやがあり、みがきもしっかりしているので、完形品であったならば、さぞかし見事なものであったろう。

41、42は胸部のみのもので、いずれも砂岩質のものである。みがきはとても丹念である。

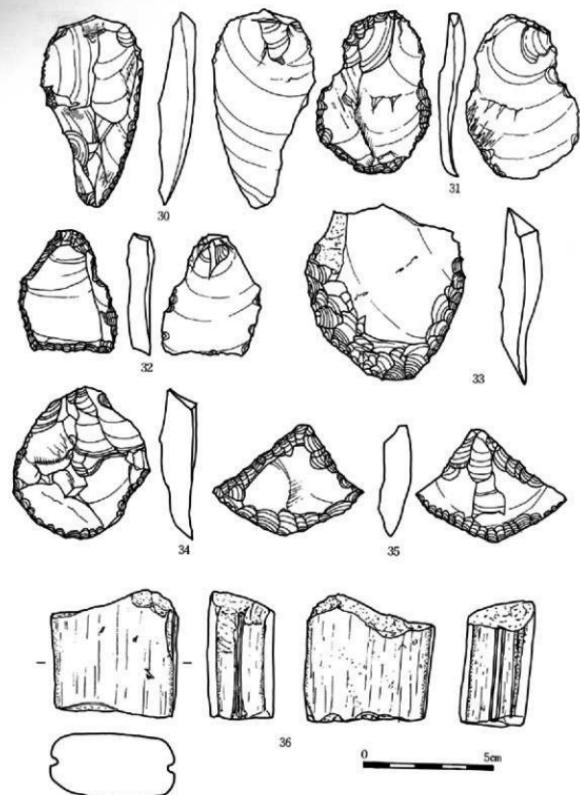
#### ⑪ 打製石斧（写真図版第21図）

一部磨製を含めて15点出土している。

磨きが顕著になっているのは1と2であるけれども、3から11まではにも部分的に認められる。つまり3から11までのものには、原石面が少なからず残っており、そこに磨きをいたるものや、側面を磨いたものなどがみられる。⑩でみた磨製石斧のように全体的にすり

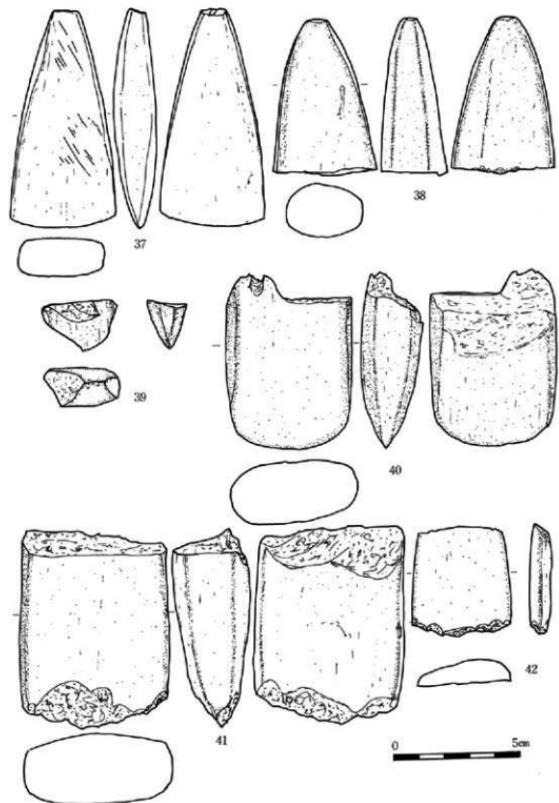


第21図 石器実測図（石錐・石剣・搔器）



第22図 石器実測図（搔器・刻線石製品）

-38-



第23図 石器実測図（磨製石斧）

-39-

磨いたものではないので、打製石斧に一括しておく。

12~15は磨きのない打製石斧である。特に14と15は打ち欠きが甚だしい。

型式的にはいくつかのタイプに分けることも可能であるが、完形品であるのかないのか判断に迷うものもあるので、作製方法で1・2のグループ、3~11のグループ、12~15のグループだけにとどめておく。なお、最も大きいのが3の打製石斧で、最大長が16.5cm、最大幅7cm、最大厚4cmという大型である。

#### ⑫ 凹 石 (写真図版第22図)

直径9cm前後の円形に近いものが5点、長円形になっているものが4点、計9点の出土をみた。凹の入れ方は一様ではないが、一面に2つ以上をいれていることや表裏にみられることが共通点である。

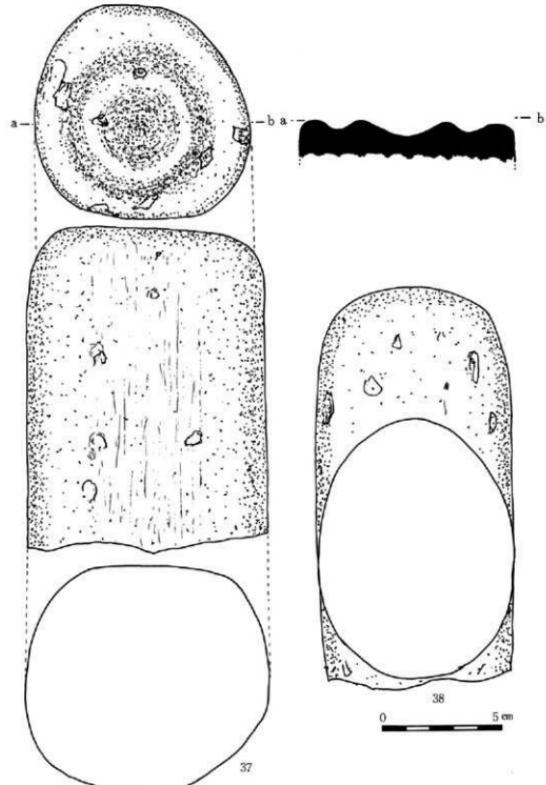
#### ⑬ 石 皿 (写真図版第23、24図)

小破片を含めると相当数にのぼるが、図版では2点しか取り上げていない。第23図の石皿は、完形品の3分の1ぐらいに相当するものである。表裏とも中央部がくぼむようにすり磨いている。表面での現有数値で計測すると、長径28.5cm、短径16.5cmで、中央部でのくぼみ数は2cmとなる。裏面でのくぼみ数は1cmであるため、表面(写真にうつっている面)の方がくぼみが大きい。器厚は大きいところが4cm、中央部が1.2cmとなっている。完形品でないため器形は推定の域を脱し切れないが、器全体が長円形となり、その周囲約5cmぐらいを残して中央部に向けてすり磨いたようである。なお脚はみられない。

一方第24図の左側の石皿は、前者のような顯著ではない。両面のすり磨きはあるけれどくぼませるようなことはせず、ほぼ平らである。

#### ⑭ すり石 (写真図版第23図)

石皿の上部にあるのがすり石である。いずれもすったあとが顕著で、相当使用したものといえる。写真左側からの数値は次のようになる。長径7.5cm、短径6.8cm、厚さ5cm。2番目は長径9.8cm短径9.2cm厚さ4.9cmで3番目は11.1cm短径8.9cm厚さ5.8cmとなる。3番目は花崗岩質のものであるが外の2点は砂岩質(安山岩?)のものである。これら3点以外にも類似品が多く見出したが、遺構のところでもふれたように、跡全体に川原石が散乱して見られるので、明らかに「すり石」といえるものだけにとどめた。



第24図 石器実測図(石棒)

#### ⑩ 砥石（写真図版第24図）

石皿の右側2つが砥石である。ほぼ直方体に近く、4面にそれなりのすられたあとが残っている。⑪の球状のすり石に対して、直方体状のすり石としてとらえられる。

#### ⑪ 刻線石製品（第22図36）

完形品でないため、全体の形状は明らかでない。周囲をすり磨き、図でいえば両側に深く溝を形成している。「刻線」というよりは「刻溝」といった方が妥当といえる。しかしこのような特殊な石製品は類例を見ていないので、断定しがたい。現有数値は、図での左右が5cm、上下も5cm、厚さ2cmで、溝の深さは0.2cmとなっている。石材はとても軽く、軽石とみまちがうばかりであるが、砂質の岩石といえよう。

#### ⑫ 石棒（第24図37、38）

部分的なものを含めると、相当数にのぼるが、図には2つだけ取り上げてみた。

37の石棒が、祭壇跡とした所から出土した石棒である。頂上部に2重円をえがくかのようににはりくぼみがある。断面図をみてもわかるように、ほぼ等間隔につくっているのは、何を表現しようとしたのだろうか……。円形に近いけれども一面にすったあとがみられるのも特徴の一つである。現有数値は、縦に13.2cm、下部の長径10cm、短径9.3cmである。

38の石棒は、住居跡（13号）近くから出土したものである。断面をみてもわかるように長円形に近いもので、円柱状とはいえないものである。現有数値は、縦に16.5cm、長径10.6cm、短径8cmとなっている。

これらの石棒は、石剣石刀関係の「武器」としての石棒ではなく、何らかの呪術関係のものとしてとらえられることができよう。

## IV 総括

本町遺跡は相当古くから知られている遺跡である。金山町中心部に近く、以前から表探やそれなりの盗掘等が行われてきている。しかしながら探集された遺物は一括して保管されておらず、辛うじて金山町中央公民館に一部だけれども集中保管されているにすぎない。地元民は口をそろえるかのように「おらだ小さいころは……」と話しに出てくる。だからこそ本町遺跡の範囲に病院移転計画が具現化し、発掘調査の必要性が生じた時から「すでに破壊されているか、さもなければ相当なる集落跡がみつかるかも……」という不安と期待が重なり合っていたといえる。それらがどうなったか、これまでの各論を整理しながら総括してみると次のようになる。

まず立地と環境である。金山川河岸段丘上に立地し、すこぶるめぐまれた立地条件となっている。すなはち狩猟生活に適まれておったといえよう。だからこそ以下に述べる集落の形成や時期の重複があったといえる。

層序をみると、必ずしも一定してはいない。自然条件によるものか、人為的条件によるものか断定に苦しむ。しかし、いくつかの時期（绳文時代の前期から中期後半まで）に何回となくこの場所を選んで居を構えたことは事実で、現地表面下約40cm前後になることもほほ間違いのない層序である。

遺構面では、13号までの住居跡を確認できた。出土土器の編年からみて、それ相応の住居跡が見つかるはずだが、一定しない層序や砂、粘土、石などの埋没状等ではっきりさせることはできなかった。検出した住居跡は、绳文時代中期中葉のものと推定できるが、何箇所かにわたって切り合いで認められることから、たった13棟ではない。

しかし、同時期とした時、そう多くの人々が生活するには食料問題を初めとして、それなりの制約があげられる。つまり、何棟かの（20～30棟ぐらいか）住居を構え、何らかの制約でこの地を離れ、何十年何百年あるいは何千年後に、別の人々が再びこの地に来て生活を営んだといえよう。このように何回かくりかえされ生活したことが、住居跡にもみられるし遺物によっても証明できる。今回の発掘によってわかったのは、中期中葉という一定期間内のものであり、4～6mの円形、8～10本の柱穴、地床炉、雨よけ等の立ち上がりなど、規則的にみると似かよった住居跡となった。

土塙は18箇所見つかった。土塙そのものの意義づけは定説がない。「貯藏穴」とするのが最有力説であるが、これまた何回かの時期にわたってこの地に生活をくりかえしたとす

れば、数はもっと多くなるはずである。顕著なものだけを取り上げたのだが、「それらしきものは」は随分とみられたことは事実である。また、住居跡内、住居跡外から検出されたように、これら土塙からも何回かの時期にわたった遺跡であったことを物語るものとしてとらえられる。

祭壇跡とした特殊構造は、この遺跡の大きな特色である。類例を知見していないため、見解の断定は現状では下せない。憶測はそれなりに出せても、かつての人々がどのような意図を持って作ったのか、それは集落成立上どんなかねあいがあるのか、石棒そのものを持つ定義づけなり小さな柱穴の存在なり、あるいは土壤の形成なり、まだまだ解明資料不足の段階なのである。

出土した遺物は、時期を探ったり、性格や規模を推し計るためには最大の資料となる。まず土器であるが、完形品や復元可能の土製品がとても少ないので特色といえる。畑という近現代の地勢ではやむを得ないことかもしれないが、また層序からみても合点いくものといえるが、予期以下であるといえよう。調査そのものの非もあるうが、もっと復元できるものが出土するであろうと期待していたことは事実である。しかしながら、6つに大別できたように、内容面ではそれなりの学術的価値をとらえることができた。層位的にははっきりしなかったけれども、これまでにわかっている縄文学的研究にあてはめると、縄文時代前期中葉に該当するもの（大木型式4～5式）から順次追うことの、縄文時代中期後半（大木型式9まで）までのバラエティに富んだ土器の出土をみた。主流は大木型式7b 8a の中期中葉であるが、この地に居を求めた時期を探る上でとても確実なしかも興味ある土器を提供しているといえよう。

土製品は比較的多くなかった。でも土偶を初めてとして、土器類の出土量をかんがみればそれ相応の出土量といえるのではないかろうか。獸面状把手とした土製品は今後の研究に課題を与えているものとしてとらえられよう。

遺物のうちの石器類は、種別はもちろんのこと数量的にも予期相応の出土であった。部分的には「もっと出土すれば」（石鏃などは）と言えるが、打製石斧や櫛器などの出土量がとても多く、縄文時代中期を中心としての遺跡としては、ますますの結果といえよう。中でも刻線（溝線）のある石製品は、知見できる類例がなく、今後の研究に待つべき点が多い。ただ、これまで述べてきたように、どの時期の石器なのか判断に苦しむ。付近の遺跡出土例からみて、石鏃は縄文時代中期後半以降のもの、縦形石匙は同期前半などとらえられているからである。したがって、石器から時期判断はできえない現状である。

さて、以上総括的にとらえてみたが、実年代はどうなのだろうか。はっきり言つて実年代をうらづける確たる物的証拠はない。これまでの考古学的研究によると、今から約7000年前頃から住むようになり、何回か住みつきそして変わるのでも、約4500年頃前までの遺跡といえる。つまりこれらの数字をそのまま妥当とすれば、約2500年に近い期間、この地を求めては居を構えた、ということになろう。

---

本町遺跡の範囲はとても広い。段丘そのものが幕坊野近くまでのびている。その間には水田があり荒地がある。そしてこの発達した段丘上には、過去の住まいを物語る遺物がいくつか発見されている。

今回の調査は、限られた予算及び日数、調査体制の中で、たった762m<sup>2</sup>を精査したにすぎない。もちろん全貌を明らかにしてこそ当時の人々の生活なり文化なりをひも解くことができるのである。後ろ髪をひかれる思いにひたりながら、調査団としては精一杯がんばってきた。調査協力員をはじめ、地元の人々、さらには関係各位の諸氏に厚く謝意を表し一次二次の調査報告書とする。（昭和56年3月31日稿丁 長沢正機）

## 写 真 図 版 集

- ◎ 作業行程のようす ..... 第1図～第6図
- ◎ 遺物の出土状況 ..... 第7図～第8図
- ◎ 遺構のようす ..... 第9図～第14図
- ◎ 出土した遺物の中から ..... 第15図～第24図



第1図 遺跡遠景



第2図 粗掘りを始める



第3図 面を整理する



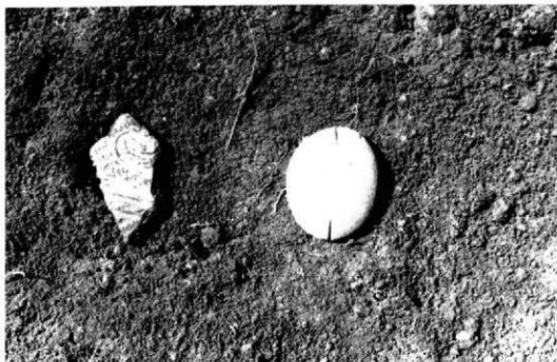
第5図 現地説明会のようす



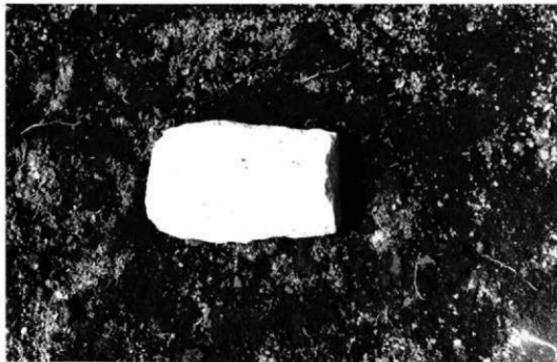
第4図 丹念に掘り進める



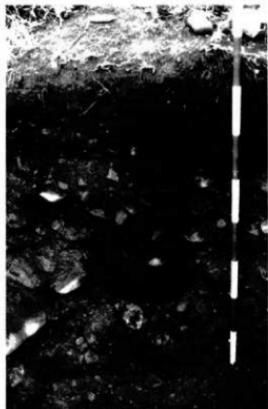
第6図 造構の測量



第7図 土器片と石鏡の出土状況



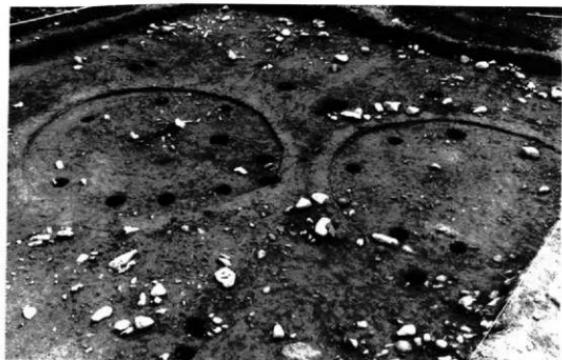
第8図 石鏡の出土状況



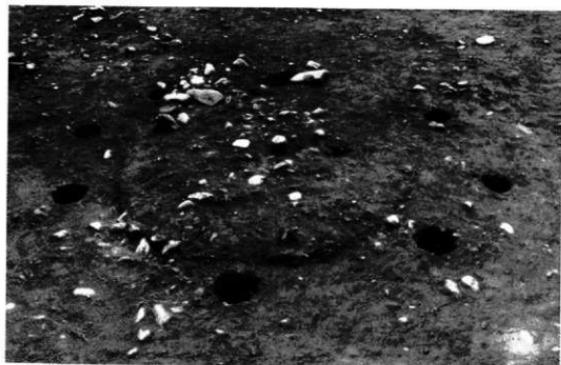
第9図 土塙(D18)の層序



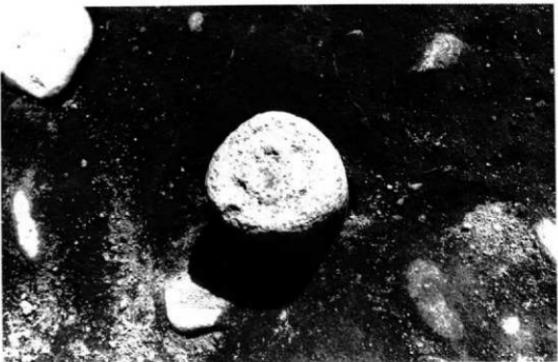
第10図 10号住居跡と土塙(D10)



第11図 第12号第13号住居跡



第12図 祭壇跡



第13図 祭壇跡の石棒出土状況



第14図 祭壇跡と層序



第15図 土器（小壺と小皿）



第16図 土偶と耳栓



第17図 土器口縁部



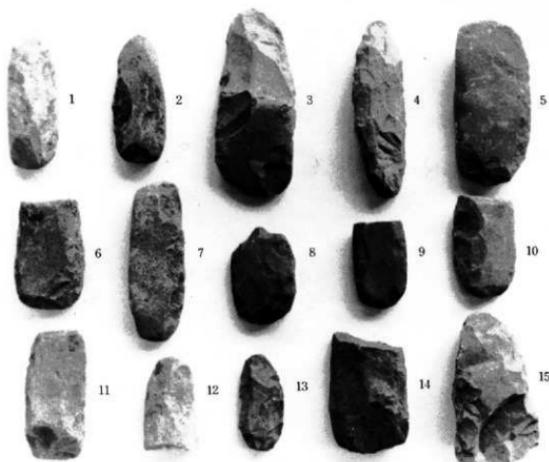
第18図 土器口縁部



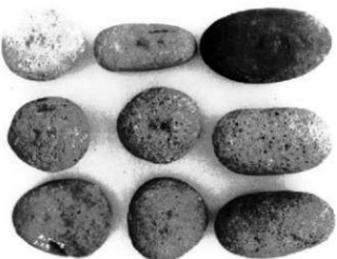
第19図 土器口縁部



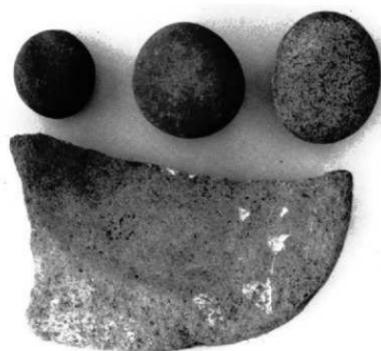
第20図 土器口縁部と底部



第21図 打製石斧



第22図 凹石



第23図 石皿と磨き石



第24図 石皿と砥石

もと まち  
**本町遺跡**

昭和56年3月31日

発行者 金山町教育委員会  
山形県最上郡金山町大字金山662

印刷所 新庄印刷  
新庄市津の町9602 ☎0232-2-7011